

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	若松 功一郎
論文題目	マイスター・エックハルトにおける知性論の研究 ——トマス主義と新プラトン主義のはざままで——
審査要旨	<p>本論文は、マイスター・エックハルトの「知性」の概念を主題として取り上げ、その知性論に大きな影響を与えたとされるフライベルクのディートリヒの知性論に注目し、エックハルトの知性論の思想史的な源泉を明らかにしようとする論文である。人間の可能知性(受動的な知性)を神の似像とみなすディートリヒの知性論からエックハルトが影響を受けていることは先行研究によってすでに明らかにされているが、人間の能動知性が神認識にかかわるという部分においてエックハルトがディートリヒから影響を受けているということは、まだ十分に明らかにされていない。本論文の特徴は、能動知性の理解におけるディートリヒからの影響について考察を行っていることにある。</p> <p>第1章では、ディートリヒの本質的原因論とエックハルトの本質的始原論との比較検討が行われ、前者においては新プラトン主義的流出論の影響によって、本質的原因の範囲が神の知性からその他の諸々の知性的実体にまで及ぶとされているが、後者においてはその範囲が神の知性に限定されていることが明らかにされる。本質的始原としての神(神の知性)は、その内側に諸々の理念(イデア)をもっており、これらの理念が原因となって被造物は存在している。本質的始原論においては、神の三位一体内部の関係性が問題にされ、父(神の知性)という位格が始原であり、子という位格は始原から生じたものであると同時に始原でもあるとされる。これは子が父の全本性を受容していることによって成り立つ。また、子という位格は神の知性がもつ諸々の理念それ自体とみなされ、この理念が範型として機能し、神の知性からすべての被造物が創造される。このように本質的始原論は、神の子の誕生と、被造物の創造とを同時に説明することを特徴とする。論者はさらに、エックハルトにおける神の存在と被造物の存在との関係について考察し、神の存在(存在の純粋性)と被造物の存在とが類比的な関係にあること、そして神の知性と対比される人間の知性がその可能的な性格において神の似像とみなされることを確認する。</p> <p>第2章では、人間の能動知性が本質的に自己認識を行う実体であるというディートリヒの知性論について考察が行われる。能動知性のうちには諸事物の理念のすべてが含まれており、能動知性は自己認識をしながら諸々の理念を受動知性に示し、諸事物の認識を成立させている。ディートリヒは新プラトン主義的流出論に基づき、自己認識する能動知性は神から発出しつつ神を認識するものであり、神の像であると考え。そして神の像としての能動知性の本質は、神を認識することであるとされる。また、ディートリヒは人間の可能知性については、これがそのつどの存在者の認識において認識対象としての形相を受容するという点から、可能知性がそれ自体としていかなる本質的な規定性も持たないものであると考え、その無規定性から可能知性を神の似像とみなす。可能知性は任意の存在者の認識においてそのつど形相を受容するが、このことからディートリヒは可能知性をあらゆる存在者の似像とも呼ぶ。さらに、可能知性は能動知性が原因となって存在することから、ディートリヒは、能動知性もまた、その活動に即して、あらゆる存在者の似像であると考え。このように人間の能動知性は、神の像であるとともに、その活動に即して見ればあらゆる存在者の似像でもあることになる。</p> <p>第3章では、第2章で明らかにされたディートリヒの能動知性理解と同様の理解がエックハルトにおいても見られることが、ドイツ語説教を手がかりにして明らかにされる。本論文の特徴的なところは、エックハルトの能動知性理解の場合、能動知性による神認識が神の恩寵によって成り立っていることをテキストに即して明らかにしていることである。エックハルトは、神の恩寵によって強化された能動知性という考えを提示し、この恩寵の受容を神の子の誕生として理解するが、こうした考えはディートリヒにはないエックハルト独自のものである。論者は、神の像としての能動知性が神の恩寵を受け入れることに関して、エックハルトの「離脱」概念に着目して考察を</p>

氏名 若松 功一郎

行い、能動知性がすべての被造物から離れた離脱の状態において神の恩寵を受け入れることを明らかにする。また、エックハルトは、日常的な認識における能動知性の働きについては、トマス主義の抽象理論を受け入れており、ここから論者は、エックハルトがトマス主義と新プラトン主義の調和を目指していることを読み取る。

第4章では、新プラトン主義的な知性理解の典拠とされていた『原因論』第15命題が取り上げられ、知性の完全還帰という考えに関するトマスの理解とディートリヒの理解とが対比され、エックハルトがディートリヒの理解を基本的に受け入れていることが、『知恵の書注解』などを手がかりにして明らかにされる。ディートリヒは、第2章で見た、能動知性の自己認識という自身の見解を、完全還帰という考えで権威づけているが、エックハルトの場合、能動知性の完全還帰としての自己認識は、神の恩寵を与えられた神の像としての能動知性において成り立つということが示される。

第5章では、人間の知性は被造物ではないと受け取られてしまったドイツ語説教の内容に対して、エックハルトが弁明しているテキストが取り上げられる。論者は、人間の知性が被造物ではないことをエックハルトが語ろうとしていたのではなく、人間の知性に与えられた恩寵としての知恵が被造物ではないということを語っていたのだと理解する。この知恵は、これを受容する基体によって成り立つようなものではなく、超範疇的なものの一つとみなされている。一性、真理、善性といった超範疇的なものは神に固有なものであり、基体に附帯して存在するものとは異なるが、エックハルトは知恵をそのような超範疇的なものとみなし、知恵はこれを受容する人間に附帯して存在する(基体としての人間から存在を受け取る)のではなく、それを受容する人間が知恵から存在を受け取るのだと考える。論者はこのような知恵のあり方に注目することによって、エックハルトにおける人間知性の非被造性への言及が異端的な主張ではないことを明らかにしている。

本論文において論じられていることは以上のとおりである。論者は、エックハルトの知性論に関する先行研究を整理し、ディートリヒとエックハルトのテキストの丹念な読解を通じて先行研究を批判的に検討し、先行研究の不十分な点を明らかにしている。その意味で本論文がエックハルトの知性論の研究において一定の学術的な貢献を行っていることは確かである。ディートリヒとエックハルトのテキストは必ずしも論理的に明晰ではなく、難解であるが、論者はそれらのテキストの内容について、テキスト間の関係に注意しながら、筋の通る解釈を提示しようと試みている。審査において、トマス、アリストテレス的な観点から、論述の理解の難しさも指摘されたが、それは、扱われているディートリヒのテキストそのものに対する批判でもあり、そのようなテキストに沿って論を展開している本論文自体の論述には大きな問題はないと判断された。宗教哲学、ドイツ神秘思想が専門の審査委員からは、本論文がディートリヒを取り上げ、エックハルトの知性論の思想史的な位置づけを行っていることに対して、高い評価が行われた。本論文は、ディートリヒの知性論のエックハルトの知性論への影響について考察し、先行研究においてその影響が可能知性の理解に限定されていることに対して、能動知性の理解にもその影響があるという明確な主張を行うことを目指し、ディートリヒの難解なテキストを詳細に検討するとともに、エックハルトのテキストにおけるディートリヒの見解の受容について明確な説明を行っており、エックハルトの知性論の研究として十分な成果をあげているとすることができる。以上により、本論文は博士学位の授与にふさわしい論文であると判断する。

公開審査会開催日	2022年 1月 22日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	岩田 圭一	古代ギリシア哲学	博士(東京大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・名誉教授	田島 照久	宗教哲学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学商学学術院・准教授	辻内 宣博	西洋中世哲学	博士(京都大学)
審査委員	立教大学文学部・教授	阿部 善彦	ドイツ神秘思想	博士(上智大学)
審査委員				